

Stock Investment

株式投資講座

Advanced

第 1 部 先物取引

第 1 章 先物取引の基礎知識	E1-1
第 2 章 先物取引の価格決定理論	E1-2
第 3 章 先物取引の特徴	E1-3
第 4 章 先物取引の投資戦略	E1-4

第1章 先物取引の基礎知識

イントロダクション

将来にわたってあらかじめ数量や金額などを決めておき、その一定の条件のもとで受け渡し（取引）を行う取引手法である先物取引について、この章では概要を学びます。

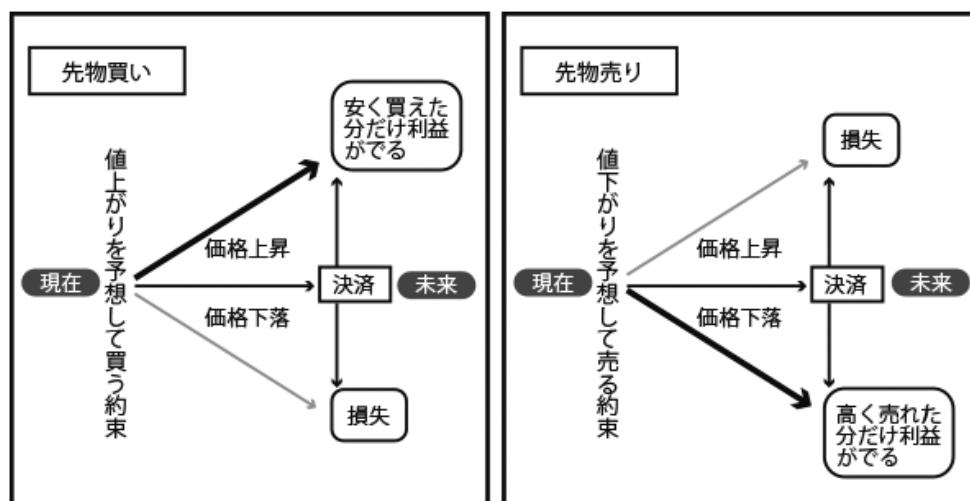
1 先物取引とは

先物取引とは、将来にわたってあらかじめ数量や金額などを決めておき、その一定の条件のもとで受け渡し（取引）を行う取引手法のことをいいます。

期日前にも反対売買を行うことが可能になっていますので、値動きによって生じる差額（差金）を利益として得ることもできます。このような手法はデリバティブ取引の1つで、金融商品そのものが持つリスクを軽減させるための重要な手法の1つでもあります。

※ポイント

反対売買とは、買いから始めた取引なら、反対の売りを行うことであり、売りから始めた取引であれば、反対の買いを行うことです。



※参考

先物取引は株式に限られたものではありません。トウモロコシや小豆などの作物を対象とした商品先物などがあります。これらの先物取引は、「商品先物取引会社」で取引を行うことが可能です。

(1) 価格変動リスクを回避する取引

株式投資には常に株価の値動きが伴います。値動き次第で大きな利益を得ることが可能になる一方で、大きな損失を被るリスクもあるのです。値動きがあるとはわかっているにもかかわらず、可能な限りリスクは小さくしたいものです。

先物取引は将来の価格変動にともなうリスクを相殺する取引方法を用いており、この取引方法をヘッジ取引といいます。ヘッジ取引には将来の値下りリスクをヘッジする売りヘッジ取引と、値上がりリスクをヘッジする買いヘッジ取引があります。

(2) 売りヘッジとは

株式などを売却する予定があるときに、現時点で価格を決めて売却する約束をし、値下がりリスクをヘッジする手法のことをいいます。

将来、株式を売却する予定があるが、その銘柄が値下がりする可能性がある場合などや、マーケット全体が下降局面であり株価の値下がり回避は避けられない場合などにも活用します。

(3) 買いヘッジとは

株価などが値上がりする可能性があるときに、現時点で価格を決めて購入する約束をして値上がりリスクをヘッジする手法のことをいいます。

株価の上昇局面で活用します。先物制度を活用してあらかじめ購入価格を決めておけば、購入する時点で値上がりしていても約束した価格で購入することが可能になります。

(4) スペキュレーション

価格が変動することを利用して利益を追求することをスペキュレーションといいます。あらかじめ売り、もしくは買いを入れている場合、期日を待たずに反対売買を行う手法のことで先物取引では欠かすことのできないものになります。

たとえば、先物取引を行い 1,000 円で購入したものを 1,500 円になった時点で売却すれば 500 円の利益を得ることができそうですが、このとき実際に現物が動く

のではなく、買値と売値の差額のみを決済する仕組みになっているのです。

この決済方法を差額（差金）決済方式といいます。

（５）スプレッド

先物取引は２つの商品の価格差を利用した取引です。この価格差のことをスプレッドといいます。

割高な方を買建てると同時に割安な方の売建てるを行い、価格差が小さくなったときにどちらも決済して差額を利益とする取引方法で、この取引方法のことをスプレッド取引といいます。

（６）裁定取引（アービトラージ）

裁定取引とは、価格が同じように動く２つの商品の間で、割安とされるものを買、割高とされるものを売ることによって収益をあげる取引のことです。こうした取引のことを「さや取り」「アービトラージ」とも呼んでいます。

現在、裁定取引は株価指数先物取引において活発に利用されていますが、この場合は現物価格（日経平均株価やTOPIX）と先物価格の理論的な価格差によって、割高・割安を判断して売買されています。

ここでの現物とは、日経 225 先物であれば日経平均株価に採用されている 225 銘柄で、TOPIX 先物ならば東証一部全銘柄を示します。

現物価格と先物価格の間には、先物取引の決済が将来に行われるために、理論的な関係が成立します。決済までの期間やその間の利息が加味されるためです。

これを理論価格といいます。先物取引における裁定取引では、この理論価格をもとに割高・割安を判断します。

実際先物価格が理論価格よりも高いときは、割高と判断し現物を買って先物を売ります。また先物価格が理論価格よりも安いときは、割安と判断し先物を買って現物を売ることになります。

2 先物取引を行うためには

(1) 専用口座を開設する

先物取引を行う場合、証券会社にて専用の取引口座である「先物取引口座」を開設することが必要です。書類による審査が必要で、証券会社によっては別途、電話にて審査を行うところも多いようです。

(2) 証拠金を差し入れる

先物取引を行う場合には、証券会社に証拠金を預け入れなくてはなりません。

損失がでたときには、証拠金から損失分を差し引く仕組みになっていて、預け入れた証拠金が不足した場合には、取引に必要な保証額を満たす金額を追加で差し入れることが必要となる場合があります。

(3) 日経平均株価先物

代表的な先物取引として「日経平均株価先物（日経 225 先物）」があります。日経平均株価先物とはその名の通り、日経平均株価の先物の取引のことをいいます。

日経平均は指数ですので、特定の銘柄を実際に購入するわけではありません。買う約束や売る約束の取引が行われ反対売買により差金決済を行います。

もうひとつの決済方法は SQ（Special Quotation）決済方式というものです。

これは、決済しなければならない月の第 2 金曜日に、日経平均株価を構成する 225 銘柄の「寄付き」の株価で計算された特別な日経平均株価と購入価格との差額を求め、その差額を決済する方法です。

株価指数先物やオプションの最終決済価格決定日、特別清算日のことを SQ 日といい、決済に用いる指数そのもののことを SQ といいます。

先物取引は、将来にわたってあらかじめ数量や金額などを決めておき、その一定の条件のもとで受け渡し（取引）を行う取引手法であるため、売りから始めることが可能になります。

このため日経平均株価が下降局面であったとしても、日経平均株価先物取引を行うことで、利益を得ることが可能になります。2002年4月の商法改正後は、「転換社債型新株予約権付社債」という名称になりました。

3 先物取引のメリットとデメリット

(1) 先物取引のメリット

株式投資の持つ値上がり・値下がりのリスクを抑えながら、利益を得ることが可能になります。このため、たとえ株式相場が下降局面でも利益を得ることができ、自分の相場観を活かすことができます。

(2) 先物取引のデメリット

先物取引では、担保をもとに現物の数倍もの取引を行うため、値動きによる値幅の振れも大きくなります。このため、気づかないうちに損失が膨らむことも多くなり、値動きによる損失のリスクは大きくなるというのがデメリットになります。

(3) 日経平均株価先物

代表的な先物取引として「日経平均株価先物（日経 225 先物）」があります。日経平均株価先物とはその名の通り、日経平均株価の先物の取引のことをいいます。

日経平均は指数ですので、特定の銘柄を実際に購入するわけではありません。買う約束や売る約束の取引が行われ反対売買により差金決済を行います。

もうひとつの決済方法は SQ（Special Quotation）決済方式というものです。

これは、決済しなければならない月の第 2 金曜日に、日経平均株価を構成する 225 銘柄の「寄付き」の株価で計算された特別な日経平均株価と購入価格との差額を求め、その差額を決済する方法です。

株価指数先物やオプションの最終決済価格決定日、特別清算日のことを SQ 日といい、決済に用いる指数そのもののことを SQ といいます。

先物取引は、将来にわたってあらかじめ数量や金額などを決めておき、その一定の条件のもとで受け渡し（取引）を行う取引手法であるため、売りから始めることが可能になります。

先物取引のメリット・デメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none">・相場が下降局面でも利益を得ることができる。	<ul style="list-style-type: none">・相場がはずれると損失を被ることになる。
<ul style="list-style-type: none">・自分の相場観を活かせる。	<ul style="list-style-type: none">・追加で証拠金が必要になることもある。